「万歳のポーズ」で獲物を摂食しているカノウアシナガムシヒキ

写真は、カノウアシナガムシヒキが前脚を上にあげたいわゆる「万歳のポーズ」で獲物を摂食しているところです。獲物を捕らえるとそれに口吻を突き刺した状態で、このような万歳のポーズをとり、摂食を行ないます。

今までの観察では、カノウアシナガムシヒキが食べていたのはハバチsp.、ヒメバチsp.、キスジセアカカギバラバチ、カギバラバチsp.、ヒメハナバチsp.、コハナバチsp.とすべてハチ目の昆虫であり、まさに真っ黒なハチのハンターです。不思議なことにカノウアシナガムシヒキの生息地で、これらのハチ類は普通に見られるものではなく、スウィーピングを行なってもこれらのハチ類はほとんど採集できませんでした。

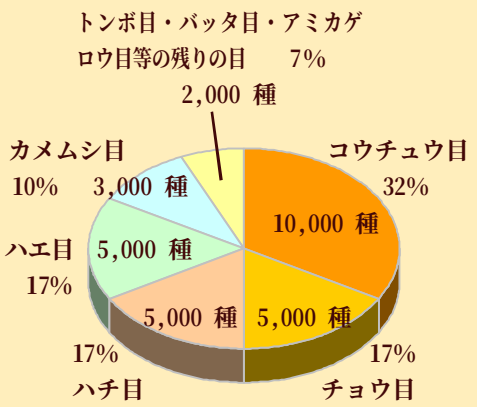
ムシヒキアブ科は、静止して近くに飛来する昆虫を捕らえるという捕食様式をとるのですが、生息地にはヒゲブトハナムグリやコメツキムシ類などが多く見られるにもかかわらず、それらを捕食している個体はまったく見られないことから、カノウアシナガムシヒキは、ハチ目の昆虫を選択して捕食しているのではないかと考えられます。

昆虫類の多様性を最大限に生かす

環境調査の目的は、調査地の立地環境特性を動植物から的確につかむことではないかと考えています。そうした場合、非常に多様で様々な環境に適応している昆虫類は、立地環境特性を評価するためのいろいろな指標として使えるすぐれた分類群ではないかと思われます。

現在、日本で名前がついている昆虫類は約３万種います。その内訳は下図のとおりで、コウチュウ目、チョウ目、ハチ目、ハエ目、カメムシ目の５大目（昆虫類の中で最も多様な５つの目）で昆虫類の９割以上を占めています。

日本で名前がついている昆虫類の構成



ところが、肝心の情報量については、チョウやトンボ、一部のコウチュウ目、蛾などに極端に偏っているため、残念ながら指標昆虫やレッドリスト種などは、上記の５大目のうちコウチュウ目とチョウ目が大部分を占め、残りはトンボ目などの５大目以外の目から選定されているのが現状です。

非常に多様で様々な環境に適応している昆虫類の中で、一部のチョウやトンボ、コウチュウ、蛾だけを用いて評価をするのは明らかに片手落ちで、昆虫類の多様性という最大の特徴を１００％生かしていないと云うことになります。今はまだわかりませんが、ここで述べたカノウアシナガムシヒキも、もしかするとものすごく特殊な環境を指標する昆虫なのかもしれません。

ハエ目、ハチ目、カメムシ目の中にもすぐれた指標昆虫となりうるグループ（例えば良好な水辺環境の指標、良好な海浜砂丘の指標など）はたくさん含まれていると思われます。縁あって昆虫に取り組んでいる者として、昆虫類の多様性を仕事に研究に最大限に生かしたいという思いは強くあります。何とかそれらを生かせてやれるようにこれからも精進していきたいと思います。

（本社自然環境調査室・伊東憲正）